

ラジオ放送
＜平成31年1月～3月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.426

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☎️ 金光教の先生のお話です。

- 年頭放送 幸せを生む生き方
金光教教務総長 西川良典 *page 1*
- 命の誕生～子を持って知る親の恩～
本部在籍 金光浩道 *page 5*
- 重たい荷物を一人で背負っていませんか？
兵庫県・三木教会 片島齋弘 *page 10*
- どうして自分だけが
大阪府・金岡教会 岩本威知朗 *page 14*
- 生きるのが楽になった (信心ライブ)
page 18
- 透き通った食べ物
大阪府・羽曳野教会 渡辺順一 *page 22*
- 次男の受験
青森県・青森教会 北林晴美 *page 26*
- お菓子の袋 (信心ライブ)
page 30
- 神様、カムバック！
三重県・南牟婁教会 松田齋二郎 *page 34*
- 人は皆、神様の愛しい子
兵庫県・加里屋教会 井上真之 *page 38*
- ツンケンしていたMさんが… (信心ライブ)
page 42
- 神様も痛い
岡山県・入田教会 瀬戸信吉 *page 47*
- いのちをつないだ里芋
鳥取県・根雨教会 佐藤あい *page 51*

《年頭放送》

「幸せを生む生き方」

金光教教務総長 西川良典

皆様、新年おめでとうございます。ともどもに平成31年の新春を迎えさせていただきましたこと、心よりお慶び申し上げます。

信心といいますが、つい難しく考えてしまうところがありますが、信心は生活の中にあるわけですから、何か特別なことをするわけではありません。

金光教には、「あいよかけよで立ち行く」という言葉があります。それは、「あなたがあつて私がある」という関係をつくり上げていくこ

とによって、お互いが助かっていくという意味です。

身の周りの方に対して、「あなたにお世話になっていきます。ありがとうございます」という思いで接していきますと、自分の気持ちが穏やかにになり、相手の方も喜んでくださいます。

これは物に対しても同じことで、私たちは衣食住のお恵みを頂いて生きていくことができますが、そうしたお世話になる物にもお礼を言い、大切にするとという生き方が助かりの姿になっていくのです。

金光教の前教主金光様は、次のようにお話しくださっています。

「私は、眼鏡を掛けておりますが、朝起きてから晩寝るまで、一日中、眼鏡のお世話になっ

ております。いつも、この眼鏡が人間だったら
どうだろうと思うのです。日当を出して、時間
外手当ても出し、夜食も出して、今日は遅くま
で本当にご苦労でございました、ありがとうございます。
ございましたと、お礼を言うに違いありません。

ところが、眼鏡がものを言わないので、つい、
お世話になっていることを忘れがちなのです。

私は、眼鏡を掛けたり外したり、拭いたりする
時、「いつもご苦労さま、ありがとうございます」という
心を持って、扱わせてもらうように心掛けてお
ります。

眼鏡だけではありません。衣食住全て、お世
話になり通しになっている私です。私は、お世
話になる全てに対して、お礼の心を忘れないよ
うにと、そういう心を持ち続けさせてもらいた

いと、願いつけております」というお話です。

ある酪農家の方の話です。その方は、長年、
信心されていて、乳牛を一家の恩人として大切
にされ、またそのような生活をなさっています。

毎朝、何十頭という牛に向かってかしわで柏手を打
つて、「あなたたちのおかげで、酪農家として
生計が成り立っております。今日もよろしくお
願ひします」と心からお礼を言い、お願いなさ
っています。そうしますと、一般的な乳牛より
もたくさん乳の量、乳量が出て、しかも、脂肪
の割合が高く、値段がいいということです。

「あなたさまのおかげで、今月はこれだけの
乳量を頂くことができました。売り上げ代金は
これこれしかじかでございます。ありがとうございます」
ございます」

このように、牛を前に心を込めてお礼を言いますと、相手もそれに応えるという働きになって現れてきます。牛が喜んでくださり、乳量をどんどん増やしてくださるんです。

「あなたがあつて私がある」関係というのは、毎日の生活の中で、相手を敬い、尊んでいくという生き方です。そういう生き方を進めていくことで、相手が喜び、自らも助かっていくことになっていくのです。

このあり方を夫婦に置き替えてみるとどうでしょうか。

例えば、夫がサラリーマンで、奥さんが専業主婦のご家庭の場合で言えば、夫が、「わしが働いているから、家族を養っているんだ」という思いでは、恩人に対する仕方ではありません

ん。

また、奥さんは夫が元気で会社で働いていることに、どれほどの喜びとお礼の心を持っているでしょうか。

夫婦で毎日を元気に過ごさせていただいていることが、どれほどありがたいことであり、そのことをどこまでかみしめているのか、ということですよ。

それぞれの人生を大きく支え合っているお互いです。夫なら夫、妻なら妻、子どもなら子どもに対して、心からのお礼が言えているでしょうか。

子どもは親にとって大恩人です。子どもを授かったから、親にならせていただいたのです。今まで、子どもがどれほどの生きがいと喜びを

与えてきてくれたことでしょうか。

「あなたがあつて私がある」という関係は、常に相手を立てる、相手に喜んでもらう、ということです。それは、人様に対してだけではなく、お世話になる物に対してもそういう関係に立つことが大切なんだということです。

朝起きた時、一晩お世話になった布団を押し入れにしまうのでも、「あなたのおかげで、ゆつくり休ませていただくことができました。疲れを取ってください、ありがとうございますいました」。

雨が降っている日には、家に対して、「あなたのおかげで、雨に当たらずに住まわせてもらっております。ありがたいことです」と家にお礼を言う。

全てにおいて、世話になる物を恩人として敬い、感謝の気持ちを持って生活をさせていたいただくことが、「あなたがあつて私がある」という関係になっていくのです。

私たちのいのちを支えてくださっている衣食住は、ものこそ言いませんけれども、よく分かっています。その衣食住にお礼を言っていく稽古を始めていけば、家族の中に感謝し合うという関係が生まれてきます。

お互いに楽しく平和な家庭をつくっていきましよう。

どうぞ、皆様にとりまして、今年が良い年になりますように、お祈り申し上げます。

《先生のおはなし》

「命の誕生」子を待つて知る親の恩」

岡山県・本部在籍 金光浩道

11年前に長男を授かった時の、忘れられない話をさせていただきます。

結婚して間もなく、妻の妊娠が分かり、家族一同で大喜びしていました。ちょうどその頃、3日間の予定で妻が里帰りしたのですが、激しいつわりが始まり、自宅に戻ってくるのが難しくなりました。その上、出血が起こり、病院で診てもらおうと、「心拍もないし、胎児も見えないから、おそらく流産です」と告げられました。

突然の宣告、なお治まらない吐き気に、どうしてもあきらめ切れず、3日後に大きな病院で検査してもらいました。すると、「おめでとうございます。赤ちゃんの心拍が取れましたよ」と、おなかの中の子どもは無事だったことが分かりました。

再び大喜びしたものの、激しいつわりは依然と続き、妻は心身共に疲れ切っていました。何を食べても全て吐き出してしまうので、体が飢餓状態になり、そのまま実家近くの病院に即入院となりました。

妻は、おなかの中で日々成長する我が子へ思いが向けられず、ただただ妊娠生活が早く終わらないかと待ちわびる日々。あまりのつらさに、「もうやめたい！ もう無理！」と何度も弱音

を吐きました。結局、3日間の里帰りが、3カ月も滞在することになりました。

実家から自宅に戻っても、次から次へと試練は続きました。普通4、5カ月で治まると言われるつわりも分娩の直前まで続き、10人に1人程度の重度のつわりと診断されました。

さらに、妊娠8カ月の検診では、子宮の入り口である子宮頸部の長さが短くなっていると言われました。ここが短くなると、子宮の入り口が自然に開いてきてしまい、早産の恐れがあるので、入院しなければいけないと言われました。しかも、退院のめどはなく、最悪は出産まで入院になるかもしれないという説明でした。流産宣告に始まり、治まらないつわり、加えて今度は早産の危険を言い渡されたのです。

入院中の妻は、早産を避けるために、ただただ横になっていなければならぬ生活でした。

私は仕事が終わると毎日病院へ行き、病室で一緒に夕食を食べました。それが妻にとって入院中の唯一の楽しみだったと言っていました。しかし、つわりの重さに輪をかけるように、子宮の収縮を抑える点滴の副作用でさらに気分が悪くなり、毎日毎日トイレと向かい合う日々で、そばに付き添う私にとっても本当につらいものでした。

こんなに大変な思いをしたからというわけではないのですが、出産はとてもスムーズに進み、安産で長男を授かりました。結婚したら妊娠して子どもが生まれるというのはごく当たり前のように思っていました。当たり前のこと

となど何一つないんだなど、思い知らされた経験でした。

しかし、長男誕生の喜びもつかの間、さらなる試練が待ち受けていたのです。

生まれてすぐに病院の先生から、「赤ちゃんの食欲がないし、体の循環が悪い」と言われました。

確かに、お乳やミルクもなかなか飲まないし、「何だか元気がないなあ」とは思っていたのです。結局、先生から、「集中治療室に入ります」と言われました。生まれて2日目のことでした。

保育器に入った長男は、体の循環が悪いので、おなかのガスを出しやすくするために、鼻から管を通していました。さらに、栄養は点滴でしか取れないため、腕には点滴の針が刺さって

いました。

看護師さんからは、「これが赤ちゃんにとっては最善なんですよ。一番楽な状態ですから」と言われました。しかし、生まれて2日目の小さな我が子の痛々しい姿を見て、妻と共に涙が止まりませんでした。そんな私たちに、看護師さんがティッシュを持ってきてくれました。「あー、恥ずかしいな」とも思いつつ、「何とか元気になってほしい。できることなら代わってあげたい」と必死に思いながら我が子を見つめていたその時、ハッと気付かされたことがあります。それは、「私の両親も、これほどまでの慈愛をもって、私を育ててくれたのか」ということでした。

これは、ガツンと体の芯にたたき付けられた

ように感じました。今まで親の恩も分からず、あたくも自分の力で生まれて、自分の力で生きてきたように、ずいぶん好き勝手してきたものだと思わされました。

長男の治療は続き、妻の方が先に退院しました。毎日妻と2人で病院にいる長男に会いに行きました。だんだんと病状は回復し、1週間ほどで退院しました。初めて親子3人で家に戻った時には、私の両親はじめ家族が総出で迎えてくれました。我が家で長男を胸に抱いた時、その日を迎えるまでのいろんな出来事が思い出され、本当に感無量でした。

「子を持って知る親の恩」といいますが、頭で分かっているのと、自分の体験から本当に体の芯に感じて分かるのでは、こんなに違うの

かと痛感しました。

一つの命が誕生することの尊さ、当たり前のことなど何一つないということ、そして親の恩がどれだけ大きいものを、妻の妊娠、出産を通して分かせてもらいました。こうして生まれてきた長男は現在11歳。毎日元気に過ごしています。

日々の生活ではいろいろなことが起こってきますが、いつも感謝の気持ちを忘れず、自分が受けてきた恩に報いることができるよう、生活させていたただきたいと願っています。



《先生のおはなし》

「重たい荷物を一人で背負って
いませんか？」

兵庫県・三木教会 片島齋弘

私が奉仕している教会では、お参りに来た方のお話を聴かせてもらい、良い道が付くように神様をお願いするということをしています。

先日、教会の前を掃除していると、近所に住む60代の女性、道子さんが声を掛けてきました。最初は世間話をしていたのですが、話が展開し、「人が死んだらどうなるのか」という話になりました。

私は、「姿や形は見えなくなっても、見守っ

てくださいっていると申し上げますよ」と話すと、道子さんは私に、「ご先祖様は今も生きていますね」と感想を述べられ、続けてこうおっしゃいました。

「実は、今度、腰の手術をするんです。お墓参りに毎週行つて、掃除をしているんですが、それがきっかけで腰が痛くなったんです。嫁として嫁いだ家のお墓の守を一生懸命してきたのに……。『ご先祖様が来てくれるな』と言つてるのでしょうか？」。そう言われたのです。

私は、「そんなわけないと思いますよ。きっと喜ばれていると思いますよ」と話すのが精いっぱいでした。その場はそれで終わったのですが、何か悩まれているような道子さんの顔が忘れられず、お節介かもしれませんが、「重たい

荷物を一人で背負っていませんか？ 何でもお話を聴かせていただきます」という手紙を書きましました。

すると、すぐに、「実は、2年間、重く背負っている問題があるんです」と返事があり、教会に行つて話がしたいとのこと、お参りに来られました。

お話を聴かせていただくと、実は道子さん、2年前に両親を亡くし、その時弟さんとけんかをして縁が切れてしまったそうです。仲直りする気はなかったのですが、最近になって、亡くなった両親から弟のことを頼まれていたのを思い出したり、腰の手術をすることになって、自分の死を意識するようになって、何とか弟と仲直りしたいという気持ちになった。だけど、今

更どうしていいか分からない…と2年間の苦しみを吐き出されたのです。

私は一通りお話を聴いた後、「お話ししてくださいがとうございます。よく一人で辛抱されましたね。つらかったと思います。提案なんです、弟さんに手紙を書いてみてはいかがですか？ 仲直りしたいという思いが弟さんに届くように、仲直りできるように、神様にお願ひさせてもらいましょう」と話しました。

道子さんはうなずかれ、「こんなこと、誰にも相談できなくてつらかった」と涙を流されました。そして、一緒に神様にこれからのことを願ひさせてもらいました。

すると翌日、道子さんが教会に駆け込んで来られ、「とつても不思議な展開がありました」

と話されます。続けてこうおっしゃいました。

「実は昨日、帰って手紙を書いていると、2年ぶりに友人から電話があつたんですよ。その友人は弟とも仲がいい人なんです。その友人にね、弟と仲直りしたいって伝えたら、その友人は、

『僕が中に入ってあげる』と言つて、弟に連絡してくれました。そしたら、弟もこのままではいけないと思つていたらしく、『ぜひ仲を取り持つてほしい』とその友人に頼んだそうなんです。お参りしてすぐのことだったんで、本当にビックリしました。神様のお計らいとしか考えられません。本当にありがとうございます」とお礼を言われたのです。私も展開の早さにびっくりしましたが、とてもありがたく思い、一緒に神様にお礼を申し上げました。

その後、道子さんが手術のために入院した時、弟さんがお見舞いに来られ、今ではけんかしていたのが嘘のように仲良くしておられます。

それから道子さんは、事あるごとに教会にお参りに来るようになりました。そんな中、道子さんは、ある教祖様の教えに出合いました。それは、「信心しながらも、次々に不幸せが重なる」と、『何かのしわざではないでしょうか。何かの罰ではないでしょうか』と言う人がいるが、どうして、神がかわいいわが子に罰をお当てなさろうか。…今までとは心を改めて信心すれば、不幸せがおかげになつてくる」というものでした。

道子さんは私に、「ここにお参りに来る前は、『お墓参りに行っているのになぜ腰が痛くなる

のか。先祖が来てくれるなど言っているのだろうか』と思つてましたが、手術という一大事になかったら、私は弟と仲直りをしたいとは思わなかった。今は、弟との仲直りのためだったと感謝できます」と笑顔で話してくれました。

私は、道子さんとの出来事を通して、神様は私たちにいつも寄り添い、あの手この手を使つて助けてくださるんだと改めて思いました。

金光教の教えには、「神様は、人間を救い助けてやろうと思つておられ、この他には何もないのであるから、人の身の上に決して無駄事はなされない」というものがあります。ですから、私たちが出合うつらいことの中にも意味があり、「神様は私に何を言いたいのか」と、神様からのメッセージを受け取る心も大切だと思ひ

ます。

とは言え、人間ですから、つらくて仕方ない時があります。そんな時、一人でその問題を抱えていてはしんどいです。どうぞ、つらい時はお気軽に、近くの教会に駆け込んでみてください。きっと道子さんのように、助かりの道が見えてくると思います。

重たい荷物、一人で背負っていませんか？



《先生のおはなし》

「どうして自分だけが」

大阪府・金岡教会 岩本威知朗

私は、中学生の時に腎臓病を患い、半年の間、学校に行けないという経験をしました。今では、大変ありがたい出来事であったと思えるのですが、当時は大変つらいものでした。

中学1年生の冬ごろ、真っ赤な尿が出るようになりました。原因ははっきりしていません。私は、バスケットボール部に入っており、「レギユラーになりたい」という強い気持ちがありました。少々の熱があっても休まず厳しい練習に参加し、今では考えられないのですが、暑い中、

水を飲むのも制限され、それでも一生懸命に頑張っていたのです。そうした無理がたたって、真っ赤な尿が出るようになってしまったのです。

でも、痛みがなかったのも、誰にも言わずに隠していました。そうこうしていると、トイレでクラクラとして、目の前が真っ暗になったのです。いよいよ、「これはあかん！」と思いました。渋々、両親に打ち明けて病院で診てもらったところ、「腎炎が悪化している。即入院しなければいけません」とのこと、大きな病院を紹介されました。ところが、ベッドが空いておらず、自宅で絶対に安静にしてくださいと言われたのです。

自宅が金光教の教会であった私は、神様に、

「入院せず、クラブに復帰できますように」と
必死にお祈りしました。また、金光教の教師で
ある両親にも、「神様に一生懸命お願いしてな」
と頼んでいました。でも結局、病院のベッドが
空いて、入院することになりました。

この時私は、「神様にお願ひしても叶わない
んや」と、とてもつらく思いました。それに、
「同じクラブの他のみんなは元気にやっている
のに、どうして自分だけがこんな病気に」とい
う気持ちになって、夜、ふとんの中で涙が出ま
す。さらに両親に対しては、「ご信者さんのこ
とは一生懸命なのに、息子のことは放つたらか
しや。本当に祈ってくれてんか！」と恨み節に
なっていました。

病院も絶対安静で、ベッドから降りることす

ら許されません。トイレにも行けず、尿瓶やお
まるで用を足さねばなりません。恥ずかしいや
ら情けないやらという気持ちで一杯でした。そ
れでも神様に、「早く治りますように！」と、藁わら
をもつかむ気持ちで、お願いしていました。

しばらくすると、あきらめのような感じでし
ようか、「もうここで耐えるより仕方がない」
という思いになりました。恨むのも責めるのも
しんどい、自然にしようと思えたのです。する
と、肩の力が抜けたのか、だんだんと落ち着い
てきて、何だか解きほぐされていったことを、
今でも覚えています。

小児科病棟だったので、乳幼児から中学生く
らいの子どもたちばかりでした。だんだん心が
落ち着いてきた私は、おのずと周りの子たちを

見る目が生まれてきました。

隣のベッドの子に、「どこが悪いん？」と聞くと、「僕ね、熱が出たらずっと下がらない病気やねん。学校にはもう何年も行っていないねん。まだまだ退院できへんらしい」と言います。他にも、「肝臓が生まれた時から悪いねん」といった子もいました。それを聞いて私は、「みんな大変なんや。僕はまだまだ元気な方や」と思いました。

の子は、こんな病気で入院してるんやって」というように、他の子たちのことを話していたようです。

そんなふうに入院生活を過ごしているうちに、私の体の中で不思議なことが起こってきました。ある日、排尿すると、ドロドロした血の塊が出ました。「いよいよあかんのや」と思い、恐る恐る主治医の先生に伝えると、「しばらく様子をみよう」ということになりました。

それが2、3日経つと、病院の先生も驚くほどの改善がみられ、トイレへも自分で歩いて行くことを許されました。久しぶりにトイレで用を足してみると、何と、きれいな尿が出たのです。

病院に来る母にも、自分のことではなく、「あ

当たり前のことが当たり前にできる喜びを感

じたあの時の感動は、今でも忘れられません。その後、退院でき、半年ほどは運動制限などはありましたが、元気で学校に通えるようになりました。

あれから30年以上経ちますが、再発もなく、毎日元気で、感謝しながら、トイレを使わせていただいています。

金光教には、「不幸せな者を見て、真まことに可哀想という心からわが身を忘れて人を助ける、その可哀想と思う心が神心である。その神心におかげが頂ける」という教えがあります。入院している子どもたちのことが気になって、可哀想に思えた時、私の心の殻が破れ、ずっと神様がお働きくださったのだと思います。

このことを通して、これまで体を酷使してい

る私に、神様は病を通してストップをかけられ、元気であるありがたさはもちろん、多くの方のお世話になり、祈られてきたことを気付かせてくださいました。

今、子を持つ父親となった私は、当時、私の両親は、息子が入院するほどの病気になり、どれほど心配し、つらい思いをしたことかと、思いを寄せることができます。

今でも、時々、病院の前を通ります。心の中で、「今、入院中の子どもたちが、早く元気になって退院できますように」とお祈りをします。大きな教えを頂いたのだと思っています。

《信心ライブ》

「生きるのが楽になった」

今日は、愛知県金光教豊川教会長の今泉明さんが、平成30年7月14日に、兵庫県西宮市フレントホールで開かれた「金光教講演会」でお話しされたものをお聞きいただきます。

私の妻は、教会でピアノを教えております。以前、27歳の女性が、「ピアノを教えてください」と言ってきました。彼女は、3歳の女の子がいます。ですから、例えば、10時と決めておいても、多少遅れることがありますから、ということでした。

その通り、10分20分遅れてくることは当たり前。時には30分、時には1時間遅れて来ることもありました。習い始めて、半年経った時にです。月曜日の朝の10時に教えることになっておりました。

ところが、10時になっても来ません。10時半になって、妻がメールを入れました。そうしましたら、返事がありました。「さつき起きたところ。11時になったら行けると思います」と。で、11時になっても来ません。11時半になって、メールを入れました。

すると、「まだ用意ができてません。昼ご飯を食べて、1時に行きます」と、メールがきたんです。で、1時になっても来ない。1時半になって、またメールを入れました。

そうしましたら、2時ごろになって返事がききました。「今、友達とランチ。3時には行けると思います」ということであります。

3時に待っておりました。でも、3時にも来ません。3時半になってメールを入れたんです。

返事がない。今度は。

翌日も返事がありません。翌々日に、朝、「今日、朝10時に行きます」という返事ですなえ。

メールには、「ごめんなさい」も何も書いていない。

で、朝10時にまた来ないんです。10時半になったら、妻がメールを入れた。私は、まずそんな対応はできませんなえ。

そうしましたらなえ、「午前中、用事ができましたので、昼の1時に行きます」という返事

でありました。

1時になっても来ないから、1時半になってメールを入れました。そうしましたら、返事がありました。

「まだ用事が終わってません。3時に行きます」ということです。

6回すっぱかしてますなえ。よくメールをするなあと。私なら放ったらかしておくだろうと思うんですけれどもなえ…。

3時になっても来ません。結局、来たのは、3時25分であります。

彼女は、来てですなえ、「あっ先生、こんにちは。ピアノよろしくお願いしまーす」って、それだけですよ。「軽いなあー」と思いましたなえ。

でも、妻は、もつと軽かったです。

「ああ、よう来たねえー。じゃあ、しっかりやろうね」って、それだけです。そのままピアノの練習ですからねえ。一言ぐらい何かそのことについて言うかなと、私は思っていました。よくあんなニコニコとした対応ができるなと思いました。

妻は、後で言いました。「私は、何年か前から、人のことはもう、絶対に責めないと決めたの。それから、人に嫌な顔だけは絶対にしないと決めたの。そうしたら、本当に楽になった。もう人を責めないと決めるとねえ、生きていくのがほんとに楽だよ」と。「あなたもそうしたら」って言われたですねえ。ちょっと私には、なかなかできないんですけれども…。

その後、さらに言ったですねえ。「人はみな

神の子。みんな神様から、尊い神心を頂いている。だから、その神心を信じて、祈り続け、そして、待ち続けていけば、必ずいつかは分かってくれる。それを楽しみに、私は、毎日毎日、祈り続けるの」と、こう言いました。

「えー」と思いましたねえ。「いつからそんな気持ちに変わったんだろうか?」と。かなり気の強い妻でありますからねえ…。私は、ほんとに、ご主人の顔が、一遍見てみたいな思っただぐらいですねえ。自分の妻であるのに、そこまでなるのかと。

神様は、私たち一人ひとりの、至らないところ、できていないところをですわね、「いつかは分かってくれる」「いつかは改まってくれる」

と、信じて、広いご愛情の中で、包み込んでお
つてくださるのではないのでしょうか。

7 回目に来た彼女は、帰り際に初めて言いま
した。「先生、私ってひどいですね」と。「も
うこれからは、2度とあんなことはしませんか
ら」と。

それからはずね、一度もすつぽかすような
ことはしませんでした。

いかがでしたか。

家の中でも仕事の場でも、つい相手を責める
心が湧いて、思わず一言、言いたくなってしまう
こと、言ってしまうことってありますよね。

そのためにイライラが募ったり、人間関係がぎ
くしゃくしてしまったり…。すつきりした気持

ちで過ごすのは難しいものです。

今日お聞きいただいた、「相手のことを信じ
て、人を責めることをやめてみた。そうしたら、
自分も相手も、生きるのが楽になった」という
お話は、爽やかな心で暮らしていくための、す
てきなヒントになりそうです。

神様から授かった今日の日を、うれしく、楽
しく、ありがたく、大切に過ごせますように…。

《先生のおはなし》

「透き通った食べ物」

大阪府・羽曳野教会 渡辺順一

金光教祖は、多くの人々が飢えに苦しんだ幕末維新の頃、参拝者たちに、「食物はみな、人の命のために天地の神が造り与えてくださったものである。何を飲むにも食べるにも、ありがたく頂く心を忘れないようにしなさいよ」と語りました。

私たち人間が口にする食物や水は全て、天地の神様からの賜^{たまわ}り物であり、天地のいのちそのものです。私たちはその天地の恵みを体の中に頂いて、大いなる天地のいのちにつながりな

がら、掛け替えのないたった一つのわがいのちを、生かされて生きております。

そして、天地の神様が人間に与えてくださっている食べ物は、食物や飲料水だけではありません。

大地に降り注ぐ太陽の光やお湿りも、吹きそよぐ風の音も、鳥や虫たちの鳴く声も、人々が奏でる音楽や歌声も、幼い頃に聞かされた様々な物語も、人を励まし慰める優しい言葉も、人間の心と体を育む、透き通った食べ物なのです。

こんにちの日本社会は、「飽食の時代」と言われる一方で、「見えない貧困」が広がる格差社会となっております。

2013年には大阪市のマンションで、28歳の母親と3歳の子どもの遺体が発見されました

た。部屋に食べ物はなく、電気やガスも止められていました。誰にも助けを求めることができないうまま、餓死してしまつたものと思われまふ。

現代の貧困は、経済的な貧しさの問題だけではなく、追いつめられた時に、「助けて」と言える関わり合ひさえも失つた、人と人との関係性の貧しさの問題でもあります。

このような状況の中、私が奉仕する教会では、4年前から、アパートを2部屋借り受けて、行政や福祉団体と連携しながら、経済破綻や家庭内暴力などの理由で住まいを失つた人たちが一時的に避難し、新しい生活を準備する仮住まいとしての、民間シェルターを運営しています。

この3年間で40人近い人たちが、シェルターで生活をし、新たな生活の場所へ旅立つて行か

れました。

その人たちとの関わり合ひで私が気付かされたことは、心の根つこの部分が傷ついた時、人は「一人ぼっち」では生きていけない、ということなんです。

シェルターを開設した頃、1本の相談メールが入りました。1歳と3歳の子どもを抱える30代の女性からで、夫は病気で仕事ができない、とのことなんです。メールは、「今日は長男の誕生日なのに、ケーキを買うどころか、何も食べさせてやるものがない。もう明日に希望が持てない。夫が帰ってくる前に、子どもたちと心の中しようと思う」という内容でした。

私は食べ物を持って、大急ぎでその人の家を訪問しました。その女性は、生活の苦しさを泣

きながら語り続けました。そして最後に、「もう大丈夫です。話を聞いてくれるだけでうれいのに、食べ物まで運んでできてくれて、本当にありがたかった。夫と2人で頑張つて子どもを育てていきます」と話してくれました。

この女性の場合は、経済的に行き詰まり、絶望の淵に立たされながらも、自分を支えてくれている夫の存在や、神様からの恵みとして夫婦に差し向けられた子どもたちの存在が、生きる希望として改めて見詰め直され、苦難を乗り越えていく力となったのです。

しかし、様々な事情からシェルターに入所してくる人たちの中には、親子や兄弟、夫婦の關係に恵まれず、家庭が「魂の居場所」にならないまま、「一人ぼっち」で社会の底辺をさまよ

ってきた若者たちも多くいました。

20代前半の女性は、母親が再婚したことから、中学卒業と同時に家を追い出され、友人の家を転々として暮らしてきました。彼女は、幼い頃からファストフードのような物しか食べてきておらず、偏食がちで、摂食障害も患っていました。

夫婦の關係が壊れ、離婚してうつ病になった30代男性は、睡眠薬を飲み過ぎて薬物中毒になり、ほとんど食事がのどを通らないような重い摂食障害になってしまいました。

その彼は、シェルターを退所した後、毎日教会に通ってくるようになりました。神様の前で、一緒にお祈りをし、心に溜たまった怒りや悲しみを言葉にして語るようになりました。そして、

教会に通い、自分の思いを自分の言葉で語ることを繰り返していると、少しずつ怒りや悲しみとは違う感情が芽生えるようになってきました。

それは、彼が心の奥底に抱いていた、将来への夢でした。自分の夢を語り始めてから、食生活も自ら意識して整えるようになり、次第に生活のリズムを取り戻していったのです。

金光教の教会は、地域に生きる全ての人たちに開かれた、「魂のシェルター」です。悲しい時、生きづらさを感じた時、自分は「一人ぼっち」だと思ってしまう時、いつでも訪れてください。悲しければ悲しいまま、その心を受け止めてくれる居場所があります。

そして、どの教会にも、苦しみや挫折の中で

祈りを捧げ、希望の光を見出し出てきた人々の、無数の物語が渦巻いています。その助かりの物語は、人は皆神の愛いとし子であるということの証しの物語です。そして、その物語こそ、傷ついた心と体を癒やす、透き通った、魂の食べ物なのです。



《先生のおはなし》

「次男の受験」

青森県・青森教会 北林晴美

ナレーション

おはようございます。パーソナリティの大林誠です。

さて、子どもの受験というのは、親にとっても一大事ですよ。どこの学校に行くのか、どういう道を進むのか、心配が絶えません。今日はそんな受験についてのお話をご紹介します。金光教青森教会、北林晴美さんのお話で、「次男の受験」。

今日は、私の次男が高校を受験した時の体験

をお話しします。

中学3年生ともなれば、卒業後の進路を決めなければいけません。次男は、「なぜ高校に行かないといけないの？」と言うだけで、なかなか進路を決めてくれませんでした。

中学卒業後は高校に進学するのが当たり前だと思っていた私は、彼の問い掛けにきちんと答えることもできないまま、最終的な進路を決めなければいけない12月になってしまいました。

「将来何になりたい？」「何に興味がある？」と、次男に尋ねても、いつまでも明確な答えは返ってきません。

そんな中で次男は料理をするのが好きだったと思い当たりました。私が、「調理師になるなんてどう？」と、再三勧めたところ、次男もや

つとその気になってくれ、調理科のある高校を受験すると言ってくれたのです。

私は、次男がそのような気持ちになってくれたことがとてもうれしく、安心しました。

しかし、結果は不合格でした。

その結果を聞いた私は、とても悲しい気持ちになったのですが、その時、「僕、やっぱりあの高校に行きたかったなあ」と、次男が言うのです。

ちょっと前まで、「なぜ高校に行かないといけないの？ 高校なんて行きたくない」と言っていた次男が、初めて「高校に行きたい」と言ってくれたのです。私は次男からその言葉を聞いてうれしく思い、さっきまでの悲しい気持ちがあ吹き飛びました。

その後、次男もやっと前向きに受験に取り組んでくれ、いくつか受験しましたが、なかなか合格通知をもらえず、私は落ち込んでしまいましたが、

そんな時、夫が、「これ、読んでみて」と、

ある金光教の冊子を渡してくれました。その記事には、「入れてもらえる高校へ」という見出しが付けられていました。ある母親が進路について息子と意見が合わず、悩んだ末に、金光教の教会の先生に相談したところ、「入れるところに入らせていただければよろしい」と教えを頂いて納得する、という内容でした。

それを読んでいく中で、そのお母さんの心境が、私の心境そのもののように感じられたばかりか、「入れるところに入らせていただければ

よろしい」という言葉が目に入った瞬間、衝撃が走りました。

子どものためと思って、「この高校に行つてほしい」とこだわるのが、果たして、本当に子どもの将来のためになるのだろうか、「子どものために」と言いながら、自分が安心しただけの独りよがりの思いでしかなかったのではないか、と思い当たったのです。要は、子どもが自分らしく生きていくことが大切なのだと思付かせていただきました。

そして、これからは、どんな事が起こってきても、その事柄をポジティブに受け止める稽古をしていくことが親の務めなのかもしれないと感じました。

とはいえ、2月末の時点で1校も決まってお

らず、3月の最後の試験を残すのみになりました。この間、私の中での不安や心配は尽きることはありませんでした。しかし、その度に、「入れるところに入らせていただければよろしい」を心で唱え、子どもが自分らしく生きられる道が付きまますようにと祈る毎日でした。

そして、ついに最終の試験に合格し、次男は無事に高校生になることができました。

私は、次男の受験を通して、子どもを丸ごと肯定し起こってくる全ての事を引き受ける大切さを学びました。そして、子どもの幸せを思う時に親にできることは、祈りしかないと思いました。神様と一緒に子どもの成長を見守る。たとえ、子どもがどのような道を歩もうとも必ず神様が守ってくださいる、そのように思ったので

す。

それでも、我が子の将来に対する心配はなかなか尽きないもので、何かにつけて子どもが転ばないように先回りしてしまう私です。そういう私だからこそ、起こってくる全ての事柄を受け止めることができる私にならせてください、と日々祈りながら問題と向き合っていてこうと取り組んでいます。

先日、ある偉人の言葉に出会いました。「大切なのは、どれだけたくさんのことや偉大なことをしたかではなく、どれだけ心を込めたかです」。このような言葉でした。今の私にぴったりだと感じます。

お料理の火を付ける時も、洗濯機を回すためにスイッチを入れるその時でさえ、子どもが自

分らしく生きられますようにと願う。日々祈りを込めて生活しているように思います。

ナレーション

いかがでしたか。

北林さんは、子どもが自分らしく生きていきますように、そのためにも、まずは自分が、全てを受け止めていける良い親にならせてくださいと祈りました。そして、ご自身の日々の仕事に心を込めていきました。

そうですね。親は親として、自分自身を改めていかなければなりませんね。

今日も最後まで聞いていただきまして、ありがとうございました。

《信心ライブ》

「お菓子の袋」

おはようございます。

今日は、大阪府天下茶屋教会の教師・白石浩美さんが、平成28年1月に、岡山県の金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

白石さんは、結婚して4人の女の子を授かりました。ご自身が学校でいじめられた経験があったので、娘には同じような思いをさせたくない、と、神様にずっとそのことをお願いしていました。

ところが、娘さんの一人が、小学校でいじめられるようになります。

そんなある日、娘にある出来事がありました。ちょうど学校から帰った後のことです。娘が用事で外に出掛けた時、娘は偶然お友達2人と出会ったと言います。

その時、娘がお友達に、「これを捨てておいと」と頼まれたと言って、私に見せてくれたのは、そのお友達が食べたお菓子の袋とかそういうものが入ったゴミの袋でした。

私は嫌な思いがしました。何で娘にそんなゴミを持たせるのかと、そんなふうに思いました。けれども娘はそのゴミの袋を私に見せながら、「でも良かった」とそう言ったんです。

「へ、良かった？」。思いも掛けない言葉でした。

娘が言うには、以前、そのお友達と外で遊ん

でいた時に、そのお友達が、お菓子を食べて、ゴミをその場で捨てていたと。それも道路の横の溝にある、ふたをしてあるところの穴にわざわざ押し込めるようにして、ゴミを捨てていたと。その時、自分はどうすることもできなかつた。そのことを思い出して娘は、「これは自分がもらったから、自分がゴミ箱に捨てることができる。だから良かった」。そう言ったんです。

ああ、私はその「良かった」という言葉を聞いて初めて、娘はおかげを頂いているんだな、そう気付いたんです。

思い返しても娘は、私に学校であった出来事を、つらい出来事ですけど、そういったことを話している時でも、一度も泣いたことはなかつ

たですし、お友達のことを悪く言うこともありませんでした。

私はずっと仲良くしていたお友達にさえ、無視をされて、裏切られたような気持ちにもなっていたんですけど、娘はそういったところも何か悟ったように、「まあ仕方がないんだよ」、そんなふうに言っていました。

つらいことをあまり話すので、「それは嫌やったね」と私が言った時も、「ううん、そんな時は、楽しいことを考えるようにしている。好きなこととか、好きな芸能人のこととか、そんなことを考えて過ごしている」。そんなふうにも言っていました。

学校で全校生徒が外に出て遊ぶような時間の時に、そのお友達、いじめているお友達の妹さ

んが、「お姉ちゃん、やめてあげて。可哀想だからやめてあげて」。そう言ってくれたことがあつたそうです。

私はそんな下の学年の子にも分かるようないじめだったのかと思つて、悲しい気持ちになつたんですけど、娘はその妹さんのことを、「優しいんだよ、そんなふうに分かることを言ってくれたんだよ、かばってくれたんだよ」。そんなふうによろこぶように、むしろ喜んで話してくれていました。

娘はつらい中でも、うれしいこと、いいことを拾つて、悪い方にとらわれてなかつたんですね。悪いこととして思つていたのは私であつて、泣きたかつたのも私であつて、娘はどんな時も、本当に強い心、大きな心、優しい心でそのこと

を受け止めていたんだということが分かりました。

問題が起きない、悪いことが起こらない、そういうことだけがわかればいい、つらいことや嫌なこと、そういうことが起こつても、そのことをどのように受けさせていたか、それができるか、そのことをどうとらえて、過ぎさせていたか、それができるか、そういうことが大事なんだな。それは問題が起きないというおかげではないけれども、本当に娘は大きな心、強い心、広い心でそのことを受けさせていたのだので、それは本当に大きなおかげであつたんだと初めて気付くことができました。

いかがでしたか。

当時、娘さんがいじめを受けて、つらい思いをしていた白石さん。しかし、娘の言葉や行動を通して、娘は神様から大きなおかげを頂いていることに気付きました。もちろん、娘さんの言動は、「親に心配を掛けまい」という思いもあつたことでしょう。しかし、白石さんは、娘の中に、いじめに負けない強い気持ちが育っていることに気付き、その強い心がさらに育っていくことを親として願っていくことが大切だと思つたに違いありません。

「悪い方にとらわれない」。いろいろな経験、勉強を通して、知恵と知識を身に着けている大人は、そうしようと思えば思うほど、逆にどんどんと悪い方に考えてしまうことがあります。

1人の小学生の「悪い方にとらわれない」生き方が現れている姿を通して、私は自分の心を見つめ直させてもらいました。

どうぞ皆さん、今日も一日、生き生きと過ごしたいものです。

《先生のおはなし》

「神様、カムバツク！」

三重県・南牟婁教会 松田齋二郎

「よおー、久しぶり！」

街で同級生の一郎さんを見掛け、声を掛けましたが、彼の表情は暗く、人相が変わるほどやつれていました。話を聞くと、親の跡を継いだ工務店の経営が悪化し、家族もいろいろと問題を抱え、自身も原因不明の感染症で入院するなど、次々と不運に見舞われたと言います。そして、「お前、神主をしているんなら、一度、お祓はらいをしてくれないか」と言うので、私は、「金光教では神主とは言わないんだ

よ」と言い掛けましたが、「まあ、そんなことはどうでもいいか。とにかく、詳しく話を聞かせてもらおう」と思い直し、後日、一郎さんの工務店に伺いました。

仕事場には、立派な神棚が設けられていて、驚いたことに、あちこちの神社のお札ふだとともに、金光教で拜む目当てとする「天地書附てんちかきつけ」の額がくまで置かれていました。代々、家庭に複雑な事情が重なり、離婚、死別、養子縁組などを経て、今に至ったようでした。

彼は、度重なる不幸に、「これは、何かの呪いか祟たりだ」と日柄や方角を調べたり、占い師に運勢を見てもらったり、ついには霊能者どうわさされる人まで呼んだと言います。

その霊能者の方は、立派な庭石を指して、「こ

の石にはへびの霊が憑いているから、祭った方がいい」と忠告したそうです。さらにその人は神棚を指差し、「ここには神様がいないから、いくら祈っても願いは届かない。これでは守ってもらえない」と指摘し、続けて、「神様はあなたに怒っている」と言ったので、彼は途方に暮れてしまったのでした。

そこで私は、庭石の前に立って、手を合わせてみたのですが、何も感じませんでした。

ただ、「天地書附」が祭られた神棚に手を合わせた時には、ここを空っぽだと言われたことに悔しさが込み上げてきました。

私は気持ちを鎮めるように、しばらく目を閉じて祈りました。すると、神様がいつもと変わらず私の願いにじっと耳を傾けてくださって

るのを感じました。それなのに、空っぽだなんて……。その時、ハッと気付くことがありました。

私は一郎さんに向き直り、こう話しました。

「君は、ここでちゃんと拝んだことがあるのかい？ 神様を祭るだけ祭っておいて、後のこととを奥さんに押し付けていないか。だとすれば、こんなご無礼なことはない。それでは神様が逃げていってしまうよ」

どうやら凶星のようでした。彼は、頭をかきながら言いました。

「やっぱりそれで、神様が怒ってるのか？」

「いや、神様は怒るより、君がちゃんとおかげを受けてくれないのを嘆いておられると思うよ。怒っているのは、神様より君の方じゃないかな。きっと神様は、霊能者さんの言葉に、君

の怒りや恨みをそのまま映し出して見せてくださったんだ」

一郎さんの表情が変わりました。私は続けて、「この庭石にへびの霊が憑いていると言うけど、石だけ祭ってもどうにもならないよ。この敷地の下には、他にもどんな霊がどれだけ埋もれているか分からないじゃないか。それなら、神様に、『その霊たちもみんなこの神棚と一緒に祭らせてください』とお願いして守ってもらった方が楽じゃないか。金光教の神様は、天地の親神様だ。この天地の神様に、土地も、霊たちも、家族も、会社も、丸ごと守ってもらおうんだよ」。そう言うと、彼は、「うん、そうだな。そういうお祭りをしてもらえるとありがたい」とうなずいてくれました。

教会に戻った私は、「あの空っぽだと言われた一郎さんの神棚に、どうぞお帰りくださいまして、不幸続きの家族をお守りくださいますように」と願いながら、心を込めてお祭りの準備をしました。

一郎さんも、神棚を奇麗に掃除して、お祭りを仕える日まで、毎日神様に手を合わせていたようです。

こうしてお祭りの当日を迎えました。神棚にはお米やお神酒などをお供えし、これを機に、家族みんなが神様とのご縁を結び直し、ここから助かりの道が付いていくよう、祈りを込めてお祭りを仕えました。

翌日、一郎さん夫婦が教会にお参りしてきました。

「昨日はありがとう。とてもいいお祭りだったよ。感動して、泣けて泣けてしようがなかった。まるでお腹に穴を開けてもらって、そこから毒が洗い流されていったような、とても晴れ晴れとした気分だよ」と話してくれました。彼の表情は、一日でここまで変わるのかと思うほど、穏やかになっていました。

それから3カ月が過ぎた頃、一郎さんの様子をおかがいに工務店を訪れました。明るい表情で出迎えてくれた彼は、少しバツが悪そうに、「君を疑ったわけじゃないけど、実はあの後、また霊能者を呼んじやったんだ。でも今度は、『神様が戻って来られた。この家の運氣もずっと良くなった』ってさ」と言ったのです。

私は一瞬、複雑な気持ちになりましたが、「い

や、ありがたいなあ。神様は霊能者さんまで使って、一郎さんの信心を励まされたのだ」と付き、神様の深遠なお働きに強く胸を打たれたのでした。

一郎さんはその後、夫婦で教会にお参りするようになり、生活の一つ一つを教えに基づいて改めていっています。いつしか家庭の中も穏やかにになり、工務店の経営も順調です。難しいと思われていた問題にも立ち行く道が付き、運命が好転したといえるようなおかげを頂いています。

《先生のおはなし》

「人は皆、神様の愛しい子」

兵庫県・加里屋教会 井上真之

おはようございます。パーソナリティの大林誠です。

突然ですが、皆さんは、LGBTという言葉をご存じでしょうか？ 最近、ニュースでよく取り上げられるようになりましたので、ご存じの方も多いかと思えます。

LGBTというのは、性的少数者を指した言葉で、同性を愛する人、両方の性を愛する人、体と心の性が一致しない人たちのことです。

今日紹介するのは、ご自分が同性を好きだということに気付き、苦しんだ経験をお持ちの方です。

金光教加里屋教会、井上真之さんのお話で「人は皆、神さまの愛しい子」。お聞きください。

おはようございます。私は「金光教LGBT会」という金光教の性的マイノリティの団体の代表をしています。

私が初めて同性を好きだと自覚したのは、中学1年生の時でした。このことは人には言っていけないことだと思い、将来の不安が出てくるなど、悩みが深刻になっていきました。

さらに、私の場合は、仕草や口調が女の子っぽかったところもあって、からかわれたり嫌が

らせを受けたりしました。それらのことを誰にも言えず、一人で抱え込んでいました。段々と人に対する恐怖心が出てきて、不登校になり、外出するのが難しくなり、生きることに絶望していました。

そのような中で、ある金光教の先生と出会い、お取次を頂くことになりました。お取次とは、金光教の先生が悩みや苦しみを抱えている方や、願い事がある方の話を一人ひとり丁寧に聞き、寄り添い、神さまの愛情や思いを伝えてくださることを言います。

その、お取次の中で、教会の先生に、これまで人には言えなかった話を少しずつできるようになりました。先生は私のどんな話も温かい心で、丁寧に聴いてくれました。

苦しんできたことを話すのは簡単なことではありませんでした。例えば、学校で嫌がらせを受けたことを話す時には、その場面が突然、鮮明に思い出されて、呼吸が苦しくなることもありました。それでも、話すことができると、心の傷を一つ癒やしてもらえるのか、帰る頃には、すっきりした心になっていました。

自分が同性愛者だということを人生で初めてカミングアウトしたのも教会の先生でした。打ち明ける前は、引かれたり、拒絶されたりしないだろうかと不安でしたが、実際に話してみると、先生は、「聴かせてくださりありがたいです。一緒に取り組んでいきましょう」と言うてくださいました。

金光教の先生という、自分の正直な心を話せ

る人ができたことで癒やされていき、一人で抱え込んでいたことを、先生と神様と一緒に取り組むことで、孤独を感じなくなり、安心感が出てきました。そのおかげで、私は段々と、外に出ることができ、学校に通えるようになり、社会生活が送れるようになりました。

このような経験を経て、私は金光教の先生になりました。

しかし、金光教の先生で同性愛者であることを公表して生きるのはとても勇気のいることでした。

そんな中、ある80代の先生から、こんな言葉を頂きました。

「教祖様だったら受け入れていたと思いますよ。神様はあなたの味方です。LGBT当事者

の方も神様のおかげを頂かれるよう、道を開いてください」。そう励ましてくれたのです。

金光教の教祖様は、悩みや願いがある方一人ひとりの話を聴き、一人ひとりに応じてお言葉を掛けられました。例えば、ある人には「子孫繁盛、家繁盛」の大切さを説いているのですが、子どもができない人に対しては、「あなたには『教え子』という子を授けてあるであろう」と、それぞれの方に応じて説かれています。

どんな人でも味方になってくださる神様、教祖様、そして、祈ってくださいる金光教の先生の存在が勇気になり、私はゲイであることをオープンにしました。さらに、誰にも言えずに悩んでいるLGBT当事者とながり、LGBT当事者が安心して金光教にいられるように、「金

光教「LGBT会」を立ち上げました。そこから新たなご縁ができたり、LGBTの知識や理解を広める働きが生まれています。

また、私の元に様々な悩みを抱えている方が来るようになりました。中には昔の私と同じように、生きること絶望している人もいます。

私は、そのような方に対して、自分がしてもらったように話を聴き、祈り、寄り添い続けました。すると、「死ななくてよかった」「先生は自分の親みたいだ」と言われた方もいます。「教え子という子を授けてあるであろう」という教祖様の言葉のように、私には私のいのちに応じたお役を神様が授けてくださっており、とてもありがたいです。

金光教では、人はみな、神様の愛しい子とし

て、一人ひとりの話を聴き、寄り添ってくれるお取次という場があります。また、違いが尊ばれ、それぞれのいのちが輝くようにお役に立たせてくださいます。人に言えない苦しい悩みを抱えている方、一人で抱え込まずに、ぜひ金光教を訪れてみてください。

いかがでしたか。

「自分と違うから」「大多数と違うから」という理由で、人を批判したり、偏見を持つたりしてしまうことって、ありますよねえ。

でも、この世に全く同じ人間なんて存在しません。そんな世界でみんなが笑顔で暮らせるには何が大切か。皆さんも一度考えてみませんか？

《信心ライブ》

「ツンケンしていたMさんが…」

おはようございます。

今日は、金光教本部在籍の教師・金光英子さんが、昨年1月に金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

当時、金光図書館の司書として忙しい毎日を送っていた英子さんは、28年前の夏、がんが見付かり入院されました。その時の出来事です。

先生から頂いたお言葉が、「悪性です。すぐ手術しましょう。明日入院してください」というお言葉だったので、私は入院させていただきました

ました。

その時にですね、病室は2人部屋で、もう1人先に入院していらっしやる先輩がおられたわけです。「今日から入院いたします。どうぞよろしく願います」と私は頭を下げさせていただきますました。

そうするとですね、私よりちよっと年上だったと思うんですけど、その方はどうおっしゃったかというところ、「私は若い人とは合わん」って、すごく激しい口調で言われたのでびっくりしました。40歳の私を何歳と思ったのかちよっと分からないんですけど、ああそうですかと言葉を返しました。そして、部屋にロッカーがありましたので、そのロッカーを開けますと、ハンガーがありました。ハンガーを取り出して洋服を

掛けようと思いましたら、その方が、「それ、私のハンガー」って言うんです。「あつそうでしたか、それはすみませんでした」と言っただけで、怒ったようだったのでびっくりしました。それ以後ですね、何をしてもツンケンツンケン、突き刺さるような言い方をなさる同室者のMさんでした。

入院いたしますと、それまでの「分単位、秒単位」で過ごしていた毎日と違いました、時間がたつぷりありました。じゃあ、このたつぷりある時間を、人のお役に立つために使おう。特にMさんに対して使おうというふうに思わせていただきました。

お役に立とうと思うとですね、入院するとやるべきことがたくさん、やってもいいこともた

くさんありました。食事の配膳をすること、片付けること、お掃除、いろんなことがありましたので、それをさせていただいておりました。

お医者様が、「どうですかー？」と言ってMさんの所に聞きにこられます。そうすると、しかめっ面で「傷が痛い」、「食欲がない」、「気分が悪い」などなど、そういうことをおっしゃるので、お医者様も閉口しておられるような状態でした。

そして看護師さんも、「お注射しますねー」と言っただけで来られると、いやーな顔をして、「あなたの注射は好かん、嫌いじゃ」、「痛いのは嫌じゃ」とか何とかいろいろおっしゃるわけですね。「まあそんなことを言わんと、すぐ済みますから」と言いながら看護師さんも這々の体

で退出していかれます。

私は、外が暑いのに冷房があってありがたい、ラジオも聴き放題、食事を作らなくても、自分の体にぴったりの食事を作って持って来てくださる。もう本当にありがたいこといっぱい。普通のことを普通に言いながら、お役に立つことをしております。

3日目の朝のことです。歯磨きと洗面を済ますと、「おはようございます」。まあ、お互いにあいさつをさせていただくということがあったんですけれども、私も、「おはようございます」とあいさつをいたしました。

すると、Mさんが私の方を向いて、頭を下げられたんです。「あなたのような若い方に教えられました」と言うんですね。

「えっ？ どういうことですか？」って聞いてみると、「私は、私ほど我慢できる人はいないと思っただけ毎日暮らしてきました。嫌なこと、駄目なこと、悪いこと、困ったこと、不満がいつもいつもいっぱいあって、それを我慢、我慢、我慢して暮らしてきました。そして入院したらここで、『Mさん、我慢せずに痛い時は痛い、嫌なことは嫌だと言ってください』と看護師長さんに言われた」と言うのです。「そうだ、痛いこととか嫌だとか、困ったこととか駄目なこと、それを言わせてもらっていいんだと思ったら、すっかりそれを言うようになった」というふうにおっしゃってるんです。

「ところが、あなたは、（私のことですけど）良いこと、美しいこと、ありがたいこと、楽しいことを、ありがたがったり、喜んだりして、

いいなーと思いました。これからは私も、ありがたいことを探して、喜んでいけるようにしたいと思います」とこうおっしゃってですね、わーっと、こういうふうにはベッドの上で正座したまま、そこでわーっと泣かれたんです。

私にとってはびっくりです。最初に、「若い人とは合わん」と言われたこともびっくりでしたけれども、もっとびっくりしたのがこの3日目朝の出来事でした。

いかがでしたか。

英子さんの喜びに満ちた言葉や行動に触れたMさん。Mさんの心は和らぎ、ほっこりと温かい心が生まれました。

その後、お見舞いに来た方が、「この部屋は

笑顔であふれているので、病室ではないみたい」と言って驚かれたといえます。

Mさんは、あれほど嫌がっていた注射の時も、看護師さんに、「ありがとう」とお礼を言うようになり、お医者さんには、「食欲はないけれど、梅干しがおいしかった」と答え、お医者さんからは、「あなたの笑顔で私も助かります」と言ってもらえたそうです。

喜ぶ心は周りの人にも喜びを与え、お互いうれしい気持ち、幸せな気持ちになれるんですね。

Mさんが気付かれたように、私もありがたいことを見付け、一日一日を過ごしていきたいと思いました。



《先生のおはなし》

「神様も痛い」

岡山県・入田教会 瀬戸信吉

皆さんは、自閉症についてご存じですか。

「自閉」というその文字から、自分を閉じて殻にこもり、周囲の人と打ち解けられない病気のように思われている人が多いのですが、そのような障害や状態ではありません。また、子どもの頃に不適切な教育をされたために、周りの人に不信感を抱いて、心を閉ざしてしまったという障害でもありません。自閉症は、話し言葉や身振りをを用いてコミュニケーションを取ることで容易にできない障害です。

教会で奉仕する私は、3人の子どもを授かりました。長男、次男、三男とも現在社会人になり、3人とも元気に日々を過ごさせていただいています。そして、次男の歩は自閉症です。

幼い頃は、呼び掛けても、目を合わせることはほとんどありませんでした。怖いと思わないのか、高い所に行くことが多く、石垣の上を走ったり、屋根の上を走ったり、いつの間にか家から抜け出し、近くにいた時はいいのですが、どこに行ったのか分からないことが何度もあり、妻と地元をあちこち探し回ったものでした。ある時は、お墓で並んでいる墓石を眺めていたり、またある時は、よその家に入り込み、こたつに入っていたこともありました。中学生の頃からは家を抜け出すことはなくなりました

が、嫌なことがあったり、失敗したりした時、自分で自分をたたくなどの自傷行為がありません。

20年ほど前のことですが、新学年度を迎え、妻と子どもたちと金光教の本部広前にお参りした時のことです。その頃の歩は、ちよつと目を離すといなくなったり、静かにしなくてはいけない場所でも、何を言っているのか分からない、いわゆる奇声を発したりしていました。その時も奇声を発していましたので、私は周りのお参りされている人たちを気にしながら、お祈りをし、子どもたちを連れ、教主金光様の前に進みました。すると、すぐに金光様が、「神様に声を聞いてもらっておるんじやなあ」と声を掛けてくださったのです。それまでは、どこへ行っ

ても周りを気にし、時にはその場を逃げるようなこともありましたが、その奇声を、金光様は、「神様に声を聞いてもらっておるんじやなあ」とおっしゃってくださったのです。私は、その時、「ああ、そうか」と救われた思いになりました。

実はそれまで、私は子どもの気持ちをないがしろにして、自分が恥ずかしいことが中心になっていて、神様がどういう思いで私たちを思ってくださいているのかということが抜けていたことが気付かされ、一遍に解き放たれたような気持ちになりました。

この一言がありがたく、いつまでも心に残り、今もその時の気持ちを大切にさせていただいています。

それからは、歩をどこにでも連れていくことができ、奇声を発していても、「神様に聞いてもらっている」と、穏やかに聞くことができました。

それから、数々の出来事を無事に乗り越し、支援学校を卒業して作業所に通うようになった歩でしたが、25歳になった5月、教会の境内地で転んでしまうという出来事がありました。

毎日、妻と歩は運動のために夕方から30分間、速足で歩きます。その日もいつものように出掛け、10分ほど経った時、妻から、「歩が走って一人で帰ったからよろしく」と電話があり、私は、境内の入り口で待っていました。すると、自傷行為で自分の顔をたたいて、泣きながら帰ってきたので、手を引いて家に入ろうと、いつ

ものように手を伸ばしたのですが、初めてその手をはたいて、私の横を通り抜け、10メートルほど先で、頭から転んでしまったのです。

急いで歩の元に行き、抱き起こすと、泥だらけの口から血があふれ、両手も擦り傷ができていました。

口元をよく見てみると前歯が1本ないことに気付きました。すると、自分が転んだわけでもないのに、私の胸が急に苦しくなってきました。苦しみを感じながらも、とりあえず歩を家に連れて入り、洗面所で口をすすぎ、顔を洗い、擦り傷ができた両手を洗い、血があふれてくる歯の抜けた所にティッシュを詰め、妻の帰りを待っていました。

歩も鏡で歯が1本ないことに気付き、痛みを

こらえながらも口元をしきりに気にしています。困ったことに土曜日の夕方なので、歯医者に連れていくことなど頭にも浮かびません。

帰ってきた妻と交互に抜けた歯を探し回り、やっと思付けることができませんでした。抜けた歯をどうしようかと話し合いながら、ふと妻がインターネットで歯医者さんを探してみると、何と車で5分ほどの一番近い歯医者さんが診察していることが分かりました。急いで電話をして歩を連れて行き、抜けた歯を差し込んでいただきました。歩も接着してもらった歯を舌で確認しながら穏やかな顔になっていきました。

その歩の顔を見ながら気付きました。歩が転んだ時、自分がけがをしたわけでもないのに、痛いと感じたあの時、神様も私と同じように痛

いと感じてくださっていたのだと思いました。そして、歩の苦痛が早くなるようにと、月曜までどうすることもできないと考えていた私たち夫婦を、診療時間を調べるという行動に導いてくださったのだと思えたのです。

言葉にはならない奇声をも温かく受け止めて聞いてくださる神様が、いつでもどんな時でも寄り添ってくださっていると感ずることができ、ありがたいことと改めてお礼を申し上げて日々を過ごしています。

《先生のおはなし》

「いのちをつないだ里芋」

鳥取県・根雨教会 佐藤あい

ナレーション

おはようございます。パーソナリティの大林誠です。今日は皆様、どんな朝を迎えられましたでしょうか。

さて、人間誰でも、子どもを授かると、健やかな成長を願わずにいられません。しかし今日は、妊娠中におなかの中のお子さんを亡くすという体験をされた、鳥取県根雨教会の佐藤あいさんのお話です。

佐藤さんは、このことをどのように受け止められたのでしょうか。タイトルは「いのちをつ

ないだ里芋」。

私は現在3人の子の母親として、慌ただしくも充実した毎日を過ごしています。

8年前に鳥取県の根雨という町に引っ越してきました。主人と私と3歳の娘を連れての新天地。仕事に子育てに、頑張っているこうとしていたところ、待望の2人目を授かりました。

喜びを噛みしめながら日々を過ごし、生まれてくる子をみんなで心待ちにしていました。が、妊娠6カ月の時におなかの中でほんとに静かに亡くなりました。

産婦人科で先生がエコーを見ながら、「心臓が動いていない」とこわばった顔をして言われ、私は、あまりにも突然のことですぐには理解で

きず、頭が真っ白になったまま、いつもお参りしている金光教米子教会へ行きました。

教会の先生に、「病院の先生から、お腹の赤ちゃんの心臓が止まっていると言われました」と言いながら、泣き崩れてしまいました。まだ実感も何もない状態なので、涙はすぐに収まりましたが、今度は震えが止まらなくなりました。先生がすぐに神様にお祈りをしてくださり、その間、先生のお母様がずっと私の背中をさすってくださいました。

夜の7時過ぎでしたので、私が晚ご飯を食べていないだろうと、教会のご家族皆さんが、おにぎりやら、とろろ汁、野菜の煮物など、とにかくたくさん持ってきてくださいました。先生がお祈りをしている最中ではありましたが、先

生のお母様がしきりに、「おかあちゃんの体が一番大事、子どもたちのためにもしっかり食べて体を整えなさい」と勧めてこられます。

先生の祈る声を聞きながら、徐々に気持ちが落ち着いていく感じがありました。それでもその時の私は、食事がのどを通らないどころか、吐きそうな状態でした。

そうこうしていると、夫が娘を連れて迎えに来てくれました。2人の顔を見てホッとすると、また涙がポロポロ出てきます。お祈りを終えられた先生が、改めて夫と私に、「あなた方が今、悲しんどること、神様も一緒に泣いておられます。この出来事が必ずおかげになっていくように祈らせてもらいます」と言ってくださいました。

先生がお祈りくださったおかげで、先ほどのお母様の、「しつかり食べて体を整えなさい」という言葉が、神様のお言葉に思えてきて、こんな時に食べられるわけがないと思っていた里芋の煮っ転がしを一個、強引に口に入れました。

その里芋がぐうつとのどの奥に入ってきて、閉じていたのどをこじ開けるように通り、ゆっくりお腹に入ってしまった感覚を今でも忘れません。その時食べることができたのは、里芋一個だけでしたが、そのおかげでのどが広がり、それから、深い悲しみの中にあっても、毎食しっかり食べることができました。

妊娠6カ月の大きくなりかけたお腹を失った悲しみは、今までに経験したことのない深いものでした。

しかし、気持ちが落ち込む日々も、神様に手を合わせおすがりしていると、同じような境遇に遭った人と出会わせていただき、その人たちの言葉に助けられました。神様がこの難儀と思える事柄を通して、私のここからの成長を願い、導いてくださっているように思えてきました。そして、このことを通して、家族の絆も深まりました。

その後、間もなく長男を授かりました。長男が生まれる時、家族みんなが立ち会ってくれました。元気な産声を聞き、無事に生まれてきてくれたことに心からホッとしました。

新生児用ベットで眠っている弟を見つめていた娘は、「骨にならなくて良かった」と静かに一言。その言葉にびっくりしましたが、その時

初めて、この子は私が妊娠してからずっと、赤ちゃんが無事に誕生することを、一生懸命お願いしていたんだなあということに気付かされました。4歳の幼い子どもでも、「生まれてくることが決して当たり前ではない」と感じていたのです。

短かい生涯であった我が子は、私たちに大事なことを教えてくれ、これからも私たちの中で生き続けていてくれます。

つらく悲しい時ほど、神様は私たちに寄り添い、一緒になって立ち上げられるように働いてくださるのです。その先の成長を願ってくださるのです。

今でも里芋の煮っころがしを見ると、あの時のどを開いてくださったおかげで今の私があ

り、長男、次女とも出会うことができたのだと、思わず手を合わせ拝みます。

ナレーション

いかがでしたか。佐藤さんはつらい状況の中、教会の先生のお祈りと言葉、またご家族の方々の温もりに触れ、大きな一歩を踏み出されました。

私たち一人ひとりののちには、いろんな人たちの祈りや願いがこめられているんですね。このかけがえのないのち、お互いに大切にしたいと思います。

今日も最後までお聞きいただき、ありがとうございました。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
朝日放送	日曜日	あさ5時40分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

